

---

# 砂と水と月の国で

橘 塔子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

砂と水と月の国で

### 【Nコード】

N5667Z

### 【作者名】

橘 塔子

### 【あらすじ】

何時とも知れぬ時代、何処とも知れぬ世界、広大な砂漠は月の神に守護された王国によって統一されつつあった。繁栄を極めるその王都に、異国から美しい旅の楽師がやって来る。過去に因縁に持ちながらも名君と謳われる国王は、その楽師を雇い入れた。オアシスの国を舞台に、好奇心旺盛な末の王女と、真面目な属国の王子との成長を描く。

ファンタジーですが、超自然的なことはあまり起こりません…。

## 邂逅

砂漠の民に伝わる神話の中で最もよく知られているものといえば、オドナス王国起源に関するアルハ神の伝説だろう。アルハは月を司る神である。

遙か昔、広大なこの砂漠を渡る途中で方角を見失い、飢え乾いて砂に倒れた旅人がいたという。旅人はアルハ神への信仰がたいへん厚い人間であつたので、ちょうど東の空から昇ってきたこの神はそれに気づき、瀕死の彼を憐れんだ。アルハの涙は天空に懸かる満月から滴り落ちて、その地に澄んだ湖を造った。それで旅人は命を取り留めた。

水で喉を潤した後、湖畔で感謝の祈りを捧げる旅人にアルハは告げた。

おまえの信仰心に報いるためにおまえの命を助け、この湖を与えよう。おまえが我を信仰する限り、我はおまえとおまえの血族を加護するだろう。子々孫々の代までこの地に留まり、この湖を守るがいい。

だが、おまえとおまえの血族が我の心に背き非道な行いをした時は。

その時は、この湖を黒く濁らせ波を炎に変え、再び砂の中に消すだろう。

旅人はその地に留まり、水を求めて集まってきた人々をまとめて国を興した。

これがオドナス王国建国にまつわる伝説である。

「ひどいなおこないってどういうこと？」

父親の語る伝説を聞いて、少年は素直に疑問をぶつけた、

訊かれた父親は傍らの幼い息子に目をやって、優しく微笑んだ。

「裏切ったり嘘をついたり家族を傷つけたり、この国の人を不幸に

することだよ」

彼もまた息子と同じ年頃に父親へ同じ問いかけをし、やはり同じ答えをもらったことがあった。

「ふうん…」

少年は繋いだ父親の手を握り締めて、好奇心に満ちた黒い瞳を宙へ向けた。

石造りの高い天井に開いた大きな天窓から、ちょうど中天に懸かった丸い月が見える。月は濃い蜂蜜のような色をしているのに、そこから降り注ぐ光は冷たい銀色だった。

少年と父親の目の前、天窓の真下に当たる位置には白い立像があった。

月光を一身に浴びて佇むその像は、人間の等身大よりもやや大きい。身長と同じ高さの台座に乗っているため、下から眺める者はそれを仰ぎ見る姿勢になる。少年と父親もそうしていた。

月神アルハの像である。

緩やかに波打つ頭髮も瘦躯に纏いつく長い衣装も、水を掬うような形で胸の前に掲げられた両手も、白い石で作られているとは信じられないほど精巧だ。月明かりが石に刻まれた陰影をくつきりと浮かび上がらせ、今にも息をしそうに見える。ひとつの国を造り、いずれ裁きを下すとされる神は、しかし優しげな表情で彼らを見下ろしていた。

何て綺麗なんだろう、と少年は素直に思った。お月様が人の形を取ったら本当にこんな姿になるんだろうか…。

「ちちうえ」

少年は頬を紅潮させて父親を呼んだ。

「いつかアルハ様に会えるかな？」

息子の声に幼いながらもひたむきさを感じて、父親はその場にしゃがんで目線を合わせた。

「アルハ様はいつでも月のお姿をして空にいらっしゃるよ。我々を見守って下さるのだ。もちろんおまえのことね」

それから息子の肩に手をやって、立像に向き直った。

「もしアル八様がこのお姿で現れたら、その時は　この国が滅ぶ時だ」

この湖を黒く濁らせ波を炎に変え　。

その光景を思い浮かべようとしたが、少年にはうまくいかなかった。物心ついた時から見慣れている青い湖が黒く濁って砂に沈んでゆくところなど想像できるはずもない。

父上にはそれができるのだろうか。だからいつも心を配って、皆が幸せになれるように自らの務めを果たしているのだろうか。

少年は再びアル八神の立像を見上げた。

会うのは怖い。でも、本当に神様がいらっしゃるなら、会ってみたい。そう思った。

砂丘の連なりは金色の海原だった。

どこまでもどこまでも、視界の続く限り、世界の続く限り、日を浴びた金色のうねりが覆いつくしている。そしてびようびようと吹き付ける強い風が、その波頭の形を刻々と変えつつあった。遙か高み、鳥の目で見れば、ひとときも止まらぬその変化が見て取れたかもしれない。だが一片の雲もない明るい空を行く鳥はなかった。

明るい光に満ちた、不毛の砂漠　。

その海原を、ひとつの影法師が進んでいた。

砂丘から砂丘へ風とともに渡る細かい砂の粒を全身に浴びながら、ゆつくりと歩を進める者がいた。空の青と砂の金色しかない世界で、その姿だけが際立って異質に見えた。

全身をすっぽり覆うような木綿の長い上着は、砂漠の民の一般的な旅装束だ。吹き付ける砂から呼吸器官を守るために同じ木綿の布で頭部と顔を覆っているため、男か女かすらも定かではなかった。

背負った袋はたいして大きくもないが、その袋の上に何やら丁寧に布で巻かれた丸い包みが括りつけられている。それと、腰に携えた一振りの短剣　旅人の荷物はそれだけであった。果てがないよ

うに思えるこの砂漠で、旅人の存在はそれだけ。

旅人の残した足跡を、瞬きをする間に風が掻き消してゆく。過去も未来も持たないような影法師でありながら、しかし旅人はひるむことなくしつかりとした足取りで焼けた砂の上を歩んでいる。

熱い風をよけてやや俯き加減になっていた旅人の顔が、ふと、上がった。

歩みが止まる。

旅人が今越えてきた背後の砂丘から、凄まじい量の砂が滑り落ちてきた。

「そのの！ 止まれ！」

この地方の方言での怒号は、野太い声だった。同時に、人間のものではない足音。それも一つや二つではない。

旅人はゆっくりと振り返った。

砂丘の上から駱駝の群れが駆け下りてきていた。20頭はいるだろうか。騎手はいずれも旅人と同じような格好をした男たち。ただ違うのは、全員が長い蛮刀や手斧を背負っていることだった。

彼らは瞬く間に旅人を取り囲んだ。金色の埃が波のように舞い上がった。

旅人は動かない。動けないのかもしれない。

やがて一頭の駱駝が前に進み出た。

乗っているのは大柄な体つきの男だった。まだ若いようだが、日に焼けた浅黒い顔は硬い髭に覆われている。髭と同じこげ茶色の目は、狡賢い獣のような光を帯びていた。

統制された駱駝の手綱さばき、護身用にしては大仰すぎる武器。砂漠に数多く存在する盗賊の一集団らしい。オアシス都市間を行き来する隊商を襲っては生計を立てている連中だ。

「こんなところを1人で歩いているとはな。隊商とはぐれたのかい？」

髭の男　盗賊団の頭目は旅人の全身を値踏みするように見下ろした。

旅人は答えない。顔のほとんどは布に覆われて表情が伺えないが、わずかに覗く両眼は明るい灰色をしていた。銀色　　と言ってもいいかもしれない。

その瞳の色に気づいたのか、頭目は、

「異国人だな。これはいいもんを見つけた」

と、笑った。

「異国人は高値がつくんだよ。おまえが商人か逃亡奴隷か知らねえが、こんな砂漠のど真ん中を一人で彷徨ってるんだ。干からびて死ぬより売られた方がマシだろ。来な」

頭目は腰につけた片刃の蛮刀を引き抜いて、駱駝から降りた。刃は分厚く、力でぶった切る粗暴な刀だ。持つ者のいかつい体型と相まって、その武器を振るう前にほとんどの相手をひるませてしまうだろう。

立ち尽くす旅人もそんな相手の一人と見て、頭目は警戒のない素振りで近付いて来た。もちろん他の仲間が標的が逃亡しないよう注意深く取り囲んでいる。

「ツラを見せな」

蛮刀が上がり、肩の高さで止まった。その先に旅人の顎があった。顔を覆った布に、切っ先が触れる。

「傷物にはしたくねえ。大人しく……」

「……道を開けてくれないか」

一瞬、頭目の動きが止まった。発せられたその声が眼前の旅人の喉から出たと理解するまで少しかかったからだ。

武器を向けられている人間のものとは思えないほど落ち着いた、若い男の声だった。風の音にも消されず低く通る。

何だ男か、と落胆するより先に、頭目の神経をふと冷たいものが撫でた。戦いと略奪を繰り返してきた盗賊の太い神経を、だ。理由は分らない。

同じ感情を覚えたのか、取り囲む仲間がそれぞれに武器を抜いた。不穏な空気が流れる。

それを掻き消すように、頭目は声を上げて笑った。

「いい度胸だ！ それともただの馬鹿か？ いいからツラ見せる！」  
蛮刀の切っ先が横なぎに動いた。もし旅人が怯えて身をかわしたりしていたら、その顔か喉元に切り傷がついていたかもしれない。  
だが旅人は微動だにしなかったので、布だけが裂けて風に流れた。  
あらわになった旅人の顔を見て 頭目の笑いが凍りついた。大きく両眼が見開かれる。

同時に、仲間たちも動きを止めた。

こいつ…こいつは…。

「…こりゃあ驚いた…お、おまえにはどんな高値がつくか…」

頭目は蛮刀を引いて手を伸ばした。旅人の漆黒の髪が揺れている。  
誰が命じた訳でもないのに、仲間たちも次々に駱駝から降りた。  
本能で火に引き寄せられる羽虫のごとく、円の中央に立ち尽くす旅人へ向かう。乾ききった砂漠の空気が、にわかに妖しい湿度を帯びたようだった。

旅人は動かない。腰の短剣に手を伸ばすこともない。

ただ 銀色の両眼がわずかに細まった。

頭目のごつい手が、旅人の肩に触れようとしたその時 新たな足音と砂塵が沸き上った。

盗賊たちが現れたのとは逆方向、これから旅人が向かう砂丘の頂上で。

背を向けていた頭目は弾かれたように振り返った。

「その人から離れる！ 犬どもめ！」

風を切り裂いて吹き降ろした声は、まだ声変わり前の少年のものだった。

数にして盗賊たちの倍、数十騎の駱駝が砂丘に並んでいる。金色の砂と青い空の境界に立つその背に乗った者たちは、皆鮮やかな緋色の装束に身を包んでいた。騎乗でも扱いやすい中程度の長さの剣を携えている。

彼らの中央に、先ほどの声の主らしい、すらりとした小柄な騎手



がいた。

「くそっ……」

頭目は低く唸って、自らの駱駝に戻ろうとし、その前に旅人の腕を掴んだ。

いや、掴もうとした。拳は空を握っていた。そこにいたはずの旅人は、身じろぎひとつしていないように思えたのに、いつの間にか身長分ほどの距離を取っていたのである。

その距離を追うには事態は余りにも切羽詰っていた。頭目は舌打ちをしたが、次の瞬間緋色の騎手たちから矢が放たれて、慌てて駱駝に走り戻った。

騎手たちが剣を振り上げて砂丘から駆け下りてくる。

数の上で圧倒的に不利と見て、盗賊たちは潔く逃げに回った。慣れた手綱さばきで砂丘を駆け上がる。

「逃がすな！ 今日こそ一匹残らず討ち取ってやる！」

少年の叱咤で、緋色の騎手たちは激しく追撃した。駱駝の足音と剣を打ち合わせる金属音と、男たちの怒号が砂を蹴散らした。

「小僧！ この借りは返すぞ！」

頭目は右手の蛮刀で敵を薙ぎ払いながらそう叫んで、それでも未練を込めた眼差しを旅人に送って、仲間たちとともに砂を撒いて走り去った。

緋色の騎手たちは3分の2ほどが追撃に回り、残りの十数騎がその場に残った。

実に統制の取れた動きだった。盗賊とはまったく違う、訓練された兵士の動き。

そしてこの40名もの大人を指揮したのは。

「旅の人、怪我はないか？」

遠ざかってゆく盗賊たちと自らの兵団を視界の隅に置きながら、少年は旅人に声をかけた。

大人びた口調だが、見たところ歳の頃はまだ11、2歳。赤銅色の肌と夜空色の瞳。砂漠の厳しい環境を生きる者らしく精悍で端正

な顔立ちは、まだあどけなさを強く残している。他の大人たちと同じ鮮やかな緋色の装束だが、少年が頭に巻いた同色の布には金色の刺繍が施されていた。

「今のはこの辺りを縄張りにする盗賊の一団だ。殺す盗む犯すのたちの悪い連中だ」

盗賊たちとはまた別の特徴を持つ発音でそう言いながら、少年は剣を鞘にしまつて、駱駝の首を軽く叩いた。大人しく跪いた駱駝から軽やかに降りてくる。

「無事でよかった。言葉は分かるか?」

問いかけて、少年の唇が動きを止めた。初めて、旅人の顔を正面から見たのだ。

「助けてくれてありがとう。礼を言う」

旅人は微笑んだ。静謐に　　今までの喧騒などなかったかのように。

その顔は実に美しい作りをしていた。

20代半ばの青年である。灼熱の日差しを浴びながらその肌は象牙のように白い。すらりと通った鼻筋、ごく薄い朱色を帯びた唇、そして長い睫毛に縁取られた二つの目は銀細工の色をしている。

砂漠の夜を冷たく照らす月が、伶俐な銀色の三日月が人の形を取ったようだ、と少年は思った。彼が思いつくいちばん美しいものがそれだったからだ。

「異国の入だな。ま、まさか一人でこの砂漠を?」

少年は冷静を装いながら言った。同性を美しいと思うことがとても罪深く感じられたからだ。しかし目は逸らせない。

旅人は肯いた。

「北の方へ行くつもりだ」

「歩いてか!? そんな無茶な...」

少年は言葉を切った。この男にとっては無茶ではないのかもしれない、現にこの砂漠の真ん中をこうして歩いているではないか。隊商はおるか駱駝の頭も連れず。

少年は少し考えて、旅人をぼうつと眺めている部下の一人に何やら指示を出した。心ここにあらずといった風情を咎める気にはならなかった。

「なら、せめてこれを」

少年は部下から受け取った袋を旅人に差し出した。羊革製の、水の入った水筒である。

旅人は目礼し、それを手に取った。

「お心遣い感謝する」

「北へ行くのならオドナスの領土を通ることになる。あの大王国は交易が盛んで異国人に寛大だ。安心して行くといい」

それは、ここ10年ほどで急速に領土を広げてきた国の名だった。点在するオアシス都市国家を次々と併合している。砂漠の北の果てにそそり立つ急峻な山脈から、南は海岸線まで、この乾いた大地の全域を掌握しつつあった。

少年の言葉にわずかな口惜しさの響きを感じ取って、旅人は優美な眉根を寄せた。

「あなた方はオドナスの兵ではないのだね」

「違う」

少年は即答した。

「我々はロタセイの民」

砂漠の東部、ごく低い草が生い茂る土地で暮らす遊牧民である。家畜を飼う他、砂漠に行く隊商と交易をしたり、また彼らの警護を引き受けることもある。今回の盗賊狩りもその一環であったのだらう。

その衣装の鮮やかさと誇り高い民族性から『緋色の勇兵』とも呼ばれていた。

「俺はロタセイ王の息子だ。オドナスがどれだけ縄張りを広げようと、我々の手の届く範囲は我々で守る。これまでも、これからもだ」

「ご立派なお志だ、若きロタセイの戦士よ」

旅人の贅辞には微塵の厭味も下心も、また子供に向けた適当なあしらいも感じられず、少年は焼けた頬に笑みを浮かべた。

このわずかなやり取りの間に、彼は旅人に好感を持った。だが砂漠に行くものは一瞬たりとも立ち止まらない。深い絆など求めてはいけないのだと、この歳でもよく分かっていた。

「では…道中お気をつけて。あなたの旅がよい水とよい風に恵まれますように」

砂漠での別れの挨拶だった。旅人は黙って頭を下げた。

砂塵を蹴散らして遠ざかってゆくロタセイの騎手たちを見送って、旅人は足元に落ちた布を拾い上げた。

砂を払って、風に乱れた髪をまとめるように頭部に巻きつける。

「…あなたの瞳が輝きを失わぬよう」

呟きは祈りに似ていた。

再び歩き出した先の空は、もう夕暮れの赤い色に染まっていた。

もうあとわずかだ、砂が血の色に染まる時間だ。

## 邂逅（後書き）

初めてファンタジーを書きます。

あまり重くならないように気をつけますが、少し暗めになるかもしれません。

ご感想頂けると嬉しいです。

## 將軍と歌姫

3年後。

オドナスの將軍シャルナグは、広場で見慣れぬ楽器を演奏している辻音楽師が気になっていた。

粗末な服に身を包んだその樂師が手にしているのは、無花果を縦に割ったような形の弦楽器だった。それを膝から肩へ凭せかけて、短い弓で4本の弦をなぞっている。優美に伸びた無花果の先端で、左手の長い指が複雑に弦を押さえていた。人の声に近い音域の、ふくよかで艶のある、しかしどこか寂寥とした音色の楽器だった。

奏でている曲も異国の音楽のようだ。交易が盛んで多彩な文物に溢れたこの都の人々が、最初は物珍しげに足を止め、やがてうつとりと聴き入っている。

数日前に通りがかった際に耳に飛び込んできた音楽は、將軍の心にも不思議なくらい響いた。いつも店を出している露天商に訊けば、3日ほど前からここで演奏しているのだという。それからもう6日、將軍は毎日その演奏を聴きに足を運んでいた。

広場の中央では国内外の商人たちが市場を形成している。賑やかな物売りの声、甘くむせ返るような果物の匂い、家畜の鳴き声、銀製品のきらめき。それらすべてを明るいき青空と生い茂る熱帯の植物が包んでいる。この砂漠最大のオアシスの恵みで、この都では水と緑には事欠かない。

そこかしこで大道芸人や辻音楽師が客を集めていたが、この不思議な弦楽器の樂師には敵わなかった。広場の片隅の石段に腰を下ろした樂師の前には、いつしか数十人の人だかりができていた。

樂師はひとしきり甘く切なげな旋律を奏でると、最後の余韻を長く響かせて弓を止めた。

客の唇から一斉にため息が漏れ、次の瞬間大きな拍手が湧き起った。

「何ていう楽器だい、そりゃ？」

「異国の曲かね。もつと弾いてくれよ」

楽師の足元に広げてある袋に硬貨を投げ入れながら、客たちは口々に言った。

「では今度は、北の国の曲を」

楽師はそう言って笑ったように見えた。フードを目深に被り、鼻から下を薄い布で覆っているので実際の表情はよく分からない。

再び、弓が弦の上を滑った。

楽師が歌うことはない。それなのに、聴く者の脳裏には北国の冷たい雪と風が、荒涼とした凍土が、火を囲んで集う人々の踊りが、短い夏の柔らかな陽光が、鮮やかに浮かぶのだった。

シャルナグは少し離れた場所で目を閉じてそれを聴いている。今年40歳になった彼は、まさに大国の王軍を預かるに相応しい堂々とした体躯をしており、顔立ちもいかつく頬は髭に覆われている。そんな黒獅子のような容貌の彼が眉間に皺を寄せて目を瞑っているものだから、通行人が避けて通った。

「またそんな恐ろしいお顔をして、シャルナグ様、皆が怖がりますわ」

傍らに佇んでいた女があきれたような口調で言った。刺繍入りの麻の衣装を身に纏った若い女だ。オドナスの民よりももつと色素の濃い肌をしており、縮れた長い髪を頭頂で丸く結い上げていた。

シャルナグはうむと唸って目を開けて、

「どう思われる、キルケ殿？ あの楽師の演奏」

「シャルナグ様のおっしゃる通り、とても素晴らしいですわね。少し怖いくらい。弾いているのは本当に人間かしら？」

キルケと呼ばれた女は演奏に合わせて軽く鼻歌を歌う。やや低音の声が心地よく響いた。

「あの楽師は魔物か何かだと？」

「冗談ですわよ」

「うむ、冗談か。では陛下の御前で演奏させるに値するだろうか？」

キルケは首肯した。

「將軍閣下の耳は確かです」

「ありがとう。今日はあなたに来てもらってよかった」

強面の將軍の笑顔は、意外なほど人懐こかった。

樂師の演奏が終わると惜しみない賛辞と銀貨が振り注いだ。彼はいつもほんの数曲披露するだけで立ち去ってしまう。今日もまた、あまり愛想を振りまくこともなく、初日の10倍ほど溜まった銀貨をしまいつつ立ち上がった。もっと聴きたげな聴衆に会釈をして樂器を脇に抱えた。弓も本体に差し込める作りになっているようだ。シャルナグは意を決して彼の後を追った。

「樂師殿！」

広場から大通りに繋がる出口の所で呼び止めると、樂師はゆっくりと振り返った。

フードの下で銀色の眼差しが薄く光っている。冷たい色だが酷薄な感じはしない。「素晴らしい演奏だった、樂師殿。貴殿のことは都で評判になっている」

「ありがとうございます。6日前からいらっしゃってましたね」

樂師の言葉にシャルナグは驚いた。いくら自分が大男とはいえ、あの群集の中で見分けられていたとは。それともこの樂師は聴衆1人ひとりの顔を記憶しているのだろうか。

「私に何か？」

「うむ。私はシャルナグという。このオドナスで王軍を預かる將軍職に就いている。決して出自の怪しい者ではない。無礼を承知で申し上げるが、ぜひ貴殿を我が屋敷にお招きしたい」

大国の將軍が一介の辻音樂師に対してあまりにも丁寧な物言いであった。現王の軍事における片腕として領土拡大に最も貢献した武人でありながら、たいへんに生真面目な性格の持ち主である。何かしら自分よりも優れた才を持つ相手に対しては、身分に関係なく敬意を表した。

「ご同行頂けるだろうか？」



「喜んで」

楽師は目深に被ったフードと顔の薄布を取った。

「サリエルと申します。私のような者が將軍閣下にお目通り叶うなど、光栄の至りです」

「お…」

シャルナグは思わず声を出した。戦場でも滅多に見ることのできない將軍の動揺である。

そこに光が生まれたかと思うほど、楽師は美しい容貌をしていた。銀細工の両眼に透き通る滑らかな肌、遠く西方の彫像を思わせる端正な顔立ち、それを縁取る豊かな黒髪。

「これはまた…ますます人間離れだわ」

將軍に付き添っていたキルケが小さく呟いた。感嘆というより呆れたふうな口調だ。

彼の美貌に気づいた広場の群集がざわつき始めた。シャルナグは我に帰り、騒ぎになる前にと楽師を通りへと連れ出した。

オドナス王国はこの砂漠全域を統一した初の王国だった。

ももとはオアシス都市国家の一つに過ぎなかったのが、今の王に代が変わって20年、あつという間に領土を広げ、東西の交易でもたらされる莫大な富を掌中にした。

その急速な繁栄の要因は、強力な軍事力もさることながら、現王の卓越した政治手腕にあった。

オドナスに逆らう国々への侵攻は苛烈を極めたが、統治を受け入れた者たちへの待遇は実に寛大だった。都から知事を派遣しつつも基本的に自治を認め、自由な商業と文化や宗教を守ることを約束した。その一方で、隊商を狙う盗賊団の討伐にも力を注ぎ、いくつもの盗人の首が都に晒された。砂漠に点在しながら細い交易の糸で繋がっていた国や部族を、オドナスがまとめあげて太く強靱な道を敷いたのだ。何も生み出さない砂漠の地は、今や多くの人と物と金が行きかう海となっていた。

オドナス王はまた、統治する部族の若者たちを、客人として王都に招いた。そして自分の目の届く所で教育を受けさせた。もちろんこれには統治する諸国からの人質という意味もあるが、柔軟な若者の心にオドナスの優れた文化を植えつけ、将来的に彼らの祖国にそれを持ち帰らせるという意図があった。今のところ国内に多様性を認めてはいるものの、いずれは文化的にもひとつにまとめあげてより強固な国家を目指すというのが、王の長期的な戦略である。

併合された部族にとっては為政者の都合で押しつけられた平和とも言えよう。ともあれ砂漠は一人の強力な王の元で繁栄を享受しつつあった。

都市国家であった頃は街そのものがオドナス王国の本体だったので、領土が広がった今日でも王都に特定の呼称はない。

しかしその命の源であるオアシスは、『アル八神の恩寵』を意味するアルサイ湖と呼ばれていた。

砂漠で最大の面積と水量を誇るこの湖は、神話が示す通り、河川もなく雨も降らない灼熱の砂の中に突如として現れる。一説によると、遙か北方にそびえる山脈の雪解け水が伏流となり、この地に運ばれ湧き出しているとも言われているが、正確なところは分かっていなかった。だが50万人余りの王都の人口に十分な水を供給し、それでもなお青い水を満々と湛えて減ることはなかった。

アルサイ湖の周囲にはここが乾いた大地であることを忘れさせるほど濃い緑が生い茂り、畑や果樹園で作物が栽培された。もちろん漁業も盛んで、上がった淡水魚や貝類は毎朝街の市場に並んだ。

王都の市街地はオアシスの南の縁に広がっていた。高度な技術をもつて張り巡らされた水路は血管のようで、街中に澄んだ水を供給した。そのおかげで砂漠の中にあつて都は適度な気温と湿度を保ち、豊かな緑が涼しい木陰を旅人たちに提供していた。

時に砂中のエメラルドと称されるに相応しい、美しく豊かな都である。

街は水路に沿って格子状に整備されていた。中央に市場の立つ広場があり、そこからいちばん広い通りが東西南北に伸びる。道沿いには多くの商業施設や旅人相手の宿屋が立ち並び、この国の繁栄を見せつけていた。大通りから奥へ入ると、都人たちの居住区があった。白い土壁でできた低い家々がひしめき合う。路地では子供が遊びまわり、それを叱りつけて女たちは井戸端で炊事をし、物売りが賑やかな声を張り上げた。雑然とした、しかし平和な生活が垣間見える。

広場から南北に伸びる通りを北へ進むと、やがて白い壁に囲まれた巨大な建物が現れる。その後ろはすぐアルサイ湖だ。

青い湖面を背にして、街へ水を送り出す水門を守るように建つその建物こそ、このオドナスの王宮であった。

サリエルと名乗った楽師が連れて来られたのは、格子状の街のかなり北部、王宮にも程近い場所だった。

この区域は一般の居住区と違い、広い敷地に建つ大きな屋敷が多かった。人通りも少なく、閑静な印象を受ける。

シャルナグは、その中でもひととき立派な門を持つ屋敷にサリエルを案内した。門の両脇には使用人というにはあまりに屈強な佇まいの男が剣を携えて立っていたが、將軍を見ると背筋を伸ばして深く頭を下げた。オドナス軍から選り抜かれた精鋭なのかもしれない。背の低い灌木が手入れされた塀の内側は広々として、葉の大きな木々が爽やかに茂っていた。庭にも水を引いているのか、せせらぎの音がする。足元には滑らかな黒い石をつないで歩道をしつらえてあった。奥に立つ屋敷は白い壁に鮮やかな彩色がしてある。壁や屋根に凝った意匠を施せるのは裕福な証拠だった。

玄関前で数名の使用人が主人を待ち構えていた。玄関といっても、砂漠の気候柄、扉のようなものはない。麻で織り上げた布が垂れ下がっている。昼間は両脇で束ねられ、風通しをよくしていた。

シャルナグは使用人たちに来客を告げ、サリエルとキルケを先に

案内させた。

彼らは客間のような広い部屋に通された。調度品はあまりないが、柔らかな絨毯の上に低い長椅子と黒檀のテーブルがある。テーブルには円い香炉があつて、薄い香りがたゆたっていた。玄関と同じく部屋の仕切りは様々な色合いの布で、庭から吹き込む湿度を含んだ微風が心地よかった。

長椅子に少し離れて座ると、キルケは微笑を浮かべてサリエルを眺めた。切れ長の目ときりりとした眉が印象的な、どこか中性的な美しさを持つ女であつた。歳はサリエルと同じ20代半ばか、少し上に見える。

ここまで来る道すがら、シャルナグはサリエルに彼女を紹介していた。王宮付の歌手でその容貌から『オドナスの黒い歌姫』と称される当代きつての実力の持ち主であるという。

「…あなたが顔を隠していた理由が分かるわ」

歌姫の地声はどちらかといえば低音だった。低く囁くような、耳に心地よい声。

サリエルは肯いて手にした楽器を撫でた。

「余計な面倒ごとに巻き込まれるのは避けたいので」

「まあそうでしょうね。演奏にお金を払う前に、あなた自身を買おうとする者達が殺し合いを始めるかも」

物騒な台詞を吐きながらも、彼女の口調はどこか楽しげだった。

程なく 紺色の麻布を潜って、この屋敷の主が姿を現した。

「お待たせしたな」

部屋着に着替えたシャルナグ將軍は、立ち上がろうとした楽師を止めて、自分も彼らの向かいに腰を下ろした。

2人の侍女が入ってきて、手早くテーブルに瓶と杯を並べた。この地方でよく飲まれる山羊乳で作った酒だ。客のもてなしの定番である。

酒瓶を持つ侍女たちの手が震えていることに気づいて、シャルナグは彼女らの手から瓶を取った。このままではテーブルに酒をぶち

まけられる羽目になると考えたからだ。それでも客人に見とれて  
ることを咎めはせず、シャルナグは彼女らを下がらせた。

「何と言つかまあ…これほど綺麗な男がこの世にいうとは」

シャルナグは正直すぎる感想を口にして溜息をついた。

サリエルは臆するでもなく少し笑った。白い歯並びが薄い色の唇  
から覗いて、シャルナグは無意識に目を逸らした。

将軍が手ずから2つの杯に酒をつぐと、サリエルはそれを恭しく  
手に取って、彼らは乾杯した。歌手であるキルケは喉のために酒類  
は口にしないらしい。

爽やかな酸味のある酒を飲み干してから、シャルナグは訊いた。

「貴殿は見たところ西方のご出身らしいが、オドナスにはいつ来ら  
れた？」

「都に参ったのはは10日前です。その前は、ここより遙か北方、  
雪山と氷海の国を旅しておりました」

「北方…天氣のよい日に見える山脈の辺りか？」

「さらに北でございます。人の住む陸地の果て、そこより先には海  
に浮かぶ巨大な氷しかありません」

「貴殿も彼の地の生まれなのか？」

「いえ…私に故郷と呼べる土地はございません。故あって、物心つ  
いた時からこうしてさすらっております」

その故というのを尋ねたかったが、楽師は答えない気がした。旅  
人たちには様々な目的と理由があり、深くは問わないのが交易都市  
の掟だった。

「その楽器は何という？ ウードに似ているが弓で弾くのは始めて  
見る」

「前の持ち主はヴィオルと呼んでいました。西国の楽器職人の手に  
よるものです」

シャルナグは再び溜息をついて、背もたれに体を預けた。

私の半生はこの砂漠の端から端までを駆け回っていたが、この美  
しい男はさらに外側の世界を見知っているのだな。

「…サリエル殿、貴殿の腕と旅の経験を見込んでお願いがある」

「どのようなことでしょうか？」

「うむ、今日、キルケ殿の賛同が得られて腹が決まった。貴殿を王宮にお連れしようと思う。王の御前でその素晴らしい楽の音を献じては頂けないか」

サリエルはすぐに答えなつた。美しい表情からは感情が読み取りにくい、シャルナグはその沈黙を戸惑いと取った。

「王は私などとは違い芸術に明るい方だ。きっとヴィオル：だったか？ その音がお気に召すことと思う。そうなれば貴殿は宮廷楽師として召し抱えられるだろう」

「それは誠に光栄ですが…よいのですか、私のごとき素性も定かない旅の者など」

サリエルは少し声を低くした。

「王に仇なす敵国の刺客やもしれぬというのに」

聞いていたキルケが、少々わざとらしく「まあ」と声を上げたが、シャルナグは明るく笑い飛ばした。

「それが狙いなら、最初からその美貌を晒すだろう。楽器など奏でずとも自然と王宮かそれに近い所から声がかかっただろうに」

それにこの男は異質だ。そう將軍の勘が告げていた。焼けた砂を渡つて来たにも関わらず、この清澄さと恐れのないさ。明らかに外の世界から来た異物だ。我々の国とまったく関係のない遙か彼方から。

だからこそ、王の近くへ置いても安全だと思えた。

「オドナスは現王セファイド陛下の御世になって20年、急速に領土を拡大してきた国だ。今ようやく国内が落ち着き、外交と内政の整備に力を注いでいるところだ」

サリエルは肯いた。

「僭越ながら、この都はとてもよくできた街です。いろいろな国の都を見て参りましたが、ここほど平和で活気に満ちた場所は他に知りません。それに広場で演奏をしていて、ただの一度もたちの悪い

連中に絡まれたりしなかった。治安の良さには目を見張ります」

「オドナスの民はアルハ神に恥じない生き方をするよう幼い頃から教育されるからな」

將軍の言葉はどことなく誇らしげだった。

「だがまだまだ我が国は人の層が薄い　あらゆる方面においてだ。内外から優秀な人材を集めねばならんだ」

「楽師など、他にいくらでもおりましように」

「演奏が素晴らしい上に、砂漠の外を巡り歩いた楽師はそうはいない。陛下は外世界の様子を聞きたがっておいでだ。きっと貴殿を厚遇なさると思う」

サリエルは長い睫毛を伏せてしばし考え、キルケはその横顔を窺った。謙遜はするが自分を卑下している素振りはなく、醸し出す雰囲気も優雅な青年だ。ふと、気になった。

「あなたのその容貌、物腰：もしかして、どちらかの国で身分のあるお方なのでは？」

「それは違います。私は身分や権力には最も遠い立場の者」  
彼は即答した。口元に苦笑に似たものが浮かんでいる。

「　かしこまりました。オドナス王に楽の音を献じます」  
シャルナグはほっと胸を撫で下ろした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5667z/>

---

砂と水と月の国で

2011年12月20日22時50分発行